

Title	測定尺度としての「運資源ビリーフ」：レビューとその展望
Author(s)	村上, 幸史
Citation	対人社会心理学研究. 2002, 2, p. 119-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8911
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

測定尺度としての「運資源ピリーフ」：レビューとその展望

村上 幸史(大阪大学大学院人間科学研究科)

「運」はしばしば資源のように例えられる。このような「運資源」的な捉え方を、村上(1995)は「運資源ピリーフ」と呼んだ。「運資源ピリーフ」が実際の因果推論や不確実事象の判断に用いられる現象については、複数の研究がなされている。本研究では違った側面、「運資源ピリーフ」を持つ者の人物像に焦点を当てることが目的とされた。研究 1 では「運資源ピリーフ」尺度として測定に用いられている項目について検討がなされた。研究 2 では他の概念との関連性についてレビューされた後、研究 3 ではこれを補う形で行われた調査の報告がなされた。最後に、「運資源ピリーフ」そのものについて、心理学的な側面から考察がなされた。

キーワード:「運資源ピリーフ」、*gambler's fallacy*、迷信、人生

問題

「人生は有限資源だ」

(楽天市場社長・三木谷浩史)

ある意味、「運」は人生における哲学的な問題ではないだろうか。というのは、「運」について様々な考えを人は持っているからである。「運」の有無について議論がなされたり、ある種の結果について、「運」か実力かという因果推論がなされたり、あるいは「運も実力のうち」と他の概念と結び付けられて解釈されたりと、「運」は多様な解釈がなされる、いわば「多義語」である。

中でも、しばしば「運」は資源的なメタファーとして例えられる。このように「運」を使うと減ってしまう資源のようなもののように捉える考え方を、村上(1995)は「運資源ピリーフ」と呼んだ。その考え方の堅固さはピリーフと呼ぶのにふさわしい。

心理学の分野では Heider(1958)以来、「運」は原因帰属の一要因として捉えられている。この意味では運は単に結果に対する解釈である。しかしながら、「運」を幅広く捉えた場合には、不確実事象の予測にも用いられる可能性は十分に考えられる。「運資源ピリーフ」はその一つであり、因果法則を含むとすれば、しろうと理論(lay theory)として取り扱うのが良いだろう。この意味での、しろうと理論とは科学的に検証されていないが、一般には因果判断に用いられているものを指す(Furnham, 1988)。

これまで「運資源ピリーフ」が実際に不確実事象の予測に与える影響について、実験的な検討がなされてきた(村上, 1995, 2000, 2001)。「運資源ピリーフ」を持つ者は、「幸運な」結果を得た場合に、その後の不確実事象において成功する可能性を低く見積もったり、リスクな行動を回避する傾向にあるという一貫した結果が見られている。

しかし、このような結果だけでは、どういった者が「運資源ピリーフ」を持ちやすいかという、その人物像についてはほ

とんど明らかにならない。

本研究の目的は、これまでに得られた結果の中でも、判断そのものではなく、その背景要因を吟味することで「運資源ピリーフ」を持つ人間像を探ることにある。研究1及び研究 2 では「運資源ピリーフ」尺度と、その態度傾向について、複数回の調査から得られたデータについてレビューを行う。研究 3 では、他の尺度や態度との関連性について調査結果を元に検討を行う。

研究1

初めて「運資源ピリーフ」の心理学的な測定が試みられたのは、村上(1995)においてである。尺度項目の構成にあたり、村上(1995)では一般的な「運」に関する考え方が自由記述によって幅広く集められた。実際の調査ではその中から抽出した27項目(類似した項目がまとめられた後、複数の者により項目の内容がチェックされた)が用いられた。

これらの各項目に対して、回答者は「全くそうだ」から「全くちがう」までの7段階で回答した。得られたデータに対して主因子法・バリマックス回転を用いた因子分析を行ったところ、同じ因子に負荷した11項目が「運資源ピリーフ」尺度項目として用いられた。

この11項目はTable1に示す通りである。自由記述の検討では「運資源ピリーフ」には、もともと「運の量は決まっている」という側面を示す「運の定量感」と、「運は使うと減ってしまう」という側面を示す「運の減少感」の下位概念があるものとして項目は作成された。しかし因子分析の結果から、両概念に相当する項目は同一因子に負荷したため、同じ尺度の項目として扱われた(11項目の信頼性係数は.84)

村上(1997)でも、同じ項目によって測定はなされたが、アスタリスクを記した項目は同一因子に負荷しなかったために尺度から除外された。以後の研究では、この6項目の

Table1 「運資源ピリーフ」尺度の項目

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
・運は使うと減ってしまうもののような気がする。	42.2	31.0	52.5	59.2	35.6	46.3	41.8
・人生全体を通して、運のトータル量は決まっているような気がする。	21.0	36.5	36.6	34.3	17.8	32.7	27.6
・運だけで成功したあとは、ツギがなくなるような気がする。	36.1	31.1	54.5	50.9	37.6	60.5	46.9
・今までツイていなかったなら、これからツギがやってくると思う。	51.8	45.0	69.3	65.7	35.6	55.8	50.0
・良いことは、二度続かないような気がする。	26.4	31.0	31.7	38.9	25.7	40.8	25.5
・大事な勝負の前では、運を使わないでおきたい気がする。	46.3	45.7	60.4	53.2	58.4	55.1	59.2
*・人生の前半であまりラッキーなことがありすぎると、後半はろくなことがないと思う。	23.9	30.2	-	-	-	-	-
*・運は使わなければ増えるような気がする。	4.5	9.3	-	-	-	-	-
*・悪いことをすると運が逃げていくような気がする。	52.5	51.9	-	-	-	-	-
*・悪いことは、続けて起こるような気がする。	57.3	59.7	-	-	-	-	-
*・一生のうち、運が良い時期というのは限られている気がする。	34.0	-	-	-	-	-	-

(単位%)

合計得点が「運資源ピリーフ」尺度得点として用いられている。

このような態度を持つ者は、実際にはどの程度存在すると判断すべきなのだろうか。そこで Table 1 には、複数回行われた調査及び実験の中で、各回答項目に肯定的な回答をした(7段階で1~3)人数を示した。各回調査の回答者数、及び特性は以下の通りである。

- ・第1回: 学生から社会人までの 209 名(村上, 1995)
- ・第2回: 大学生 160 名(村上, 1997)
- ・第3回: 看護学生 101 名(村上, 準備中)
- ・第4回: 短大生・看護学生 275 名(村上, 1998)
- ・第5回: 大学生・専門学校生 101 名(村上, 2000)
- ・第6回: 学生から社会人までの 189 名(村上, 本研究の研究3)
- ・第7回: 看護学生 91 名(村上, 2001)

以上の結果を見ると、調査ごとにパラツキがあるもの、およそ3割から6割程度の者が、「運は使うと減ってしまう」ように捉えていることが分かる。それに対して「人生全体を通して、運のトータル量は決まっている」と考える者は、それよりも約15~20%ほど少ない(第2回を除く)。以上のことから「運資源ピリーフ」は「運の定量感」よりも、「運の減少感」を中心にまとまった概念と考えられる。

研究2

ここでは、研究1で提示した複数回の調査結果を中心に「運資源ピリーフ」と他の概念との異同性を検討する。

主にこれまで測定が行われてきたのは、Heider(1985)から始まる原因帰属の流れである。原因帰属の文脈では、Weiner(1979)の類型に代表されるように、自他という視点が区別されてきた。

村上(1995)では「運資源ピリーフ」尺度得点と、鎌原ら(1982)のLOC得点(Locus of control)との相関傾向を分析している。LOCは事象の原因を内的(自)・外的(他)のどちらの要因に帰属しやすいかという個人の傾向を測定すると考えられるが、結果は $r=.08$ と相関があるとは言えなかった。

さらに、「運資源ピリーフ」を持つ者は、特定の状況での未来の事象予測が消極的と予測される以上、「運資源ピリーフ」の有無は、事象に対して無力感を感じるかどうかの差と言えなくもない。これについては村上(1997)で、青柳ら(1985)が作成した学習性無力感の項目との関連も調べられている。この研究では学習性無力感の項目として下位概念である「劣等感」および「消極性」尺度を用いたが、「運資源ピリーフ」得点との相関は前者が $r=.05$ 、後者が $r=.13$ と低く、明らかに別の概念を測定しているものと考えられる。

また山下(2001)では、沢宮・田上(1997)らが作成した楽観的帰属様式尺度と「運資源ピリーフ」尺度¹の関連性が検討されている。楽観的帰属様式尺度は「資格試験に挑戦し、見事合格した」などのポジティブな事象、及び「電車に乗り遅れてしまった」などのネガティブな事象の両面について、過去の経験を元に未来の事象予測が楽観的(ポジティブ)か悲観的かを測定しようとするものである。ポジティブな事象については $r=.11$ 、ネガティブな事象は下位3因子に分類されたが、いずれも $r=-.07$ ~ $.08$ の間と低い値しか示されなかった。

以上のことから、事象の原因を外的に求めやすいことと「運」を外的な要因と捉えることは別物であると考えられる。つまり、要因としての「運」は外的とは限らないし、そのため「運資源ピリーフ」を持つ者は、必ずしも悲観的(ネガティブ思考)とも結論付けられないのである。

情報や経験という要因に目を移して見れば、女子学生を対象にした調査において、占いの信用度が高いほど「運資源ピリーフ」を持つという関連性が示されている(村上, 1998)。これらの学生は主に女性誌から占いに関する情報と同時に、例えば「恋愛運」や「ツギが連続する期間」など「運」に関する情報も吸収していることが分かった。「運資源」的な考え方も一つの情報であり、これを元に、バイアスをかけて自分の経験を解釈することで、信念(ピリーフ)は固定化されていくと推測される。

しかしながら、占いを信じる者には女性が多いが、「運資源ピリーフ」の有無に性差があるという証拠は得られてい

ない(村上, 1995, 1997)。また年齢のような属性とも関連は見られていない。また同じ経験という点でも、「運資源ビリーフ」とギャンブルへの関与度合いは結び付いていなかった(村上, 1999)。ただし、この研究で測定した被験者は、もともとギャンブルへの関与度が高い者で構成されており、ギャンブルへの関与度が低い者について、同じことが言えるとは限らない。

研究3

これまで得られた結果からは、「運資源ビリーフ」の有無が個人の性格特性と結びついているという結果は得られていない。「運資源ビリーフ」の有無は、性格特性のような既存のパーソナリティ要因だけでは、その多くを説明できないのではないかと考えられる。逆に、そのため「運資源ビリーフ」を持つ者は、他にどのような特徴を持ち、どのような人物であるのかという疑問も挙がる。

そこで研究3では、既存のパーソナリティ要因を含めて、「運資源ビリーフ」を持つ者は、他にどのような特徴を持つのかを探ることを目的として、質問紙調査を行った結果を報告する。

調査は大きく分けると、4つの内容から構成されている。第一は「運資源ビリーフ」と他のパーソナリティ特性の関係を調べる部分である。本研究で測定されるパーソナリティ特性は、主にリスクを含んだ不確実な事象に対する指向性や行動との関連から説明される項目である。第二はギャンブラーの錯誤(gambler's fallacy)のような統計的な知識である。特に「運資源ビリーフ」を持つ者には、このような知識が薄いのか、それとも分かっているが、あえて非合理的な判断をしやすい理由が別にあるのか(つまり「運を資源と考えること」)を探る。第三は過去の経験(についての認知)であり、ギャンブルを始めとした勝負事や「幸運」な経験と「運資源ビリーフ」との間の関連を探る。第四は世界観についての項目であり、「運資源ビリーフ」を持つ者が、どの程度科学的な迷信や因果観などを持ち合わせているのかどうかを探る。以上の調査から、「運資源ビリーフ」を持つ者の特徴を明らかにする。

方法

回答者 「不確実な事象に対するアンケート」という質問紙に回答してもらう形で調査を行った。回答者は学生から社会人までの189名、年齢は18歳から49歳(平均23.65歳、 $SD=5.89$)。分析には、多量の欠損値及び明らかに不適切な回答が見られた5名を除き、184名分(男55・女128・不明1)のデータを用いた。

調査項目

<パーソナリティ要因>

1.不確実な事象に対する指向性

これまで「運資源ビリーフ」を持つ者は、特定の状況(「幸運」な結果を得た直後、及び重要な選択の前)でリスクな行動を回避しやすい傾向があることが示されている(村上, 1995, 2000, 2001)。しかしながら「運資源ビリーフ」を持たない者よりも、もともとリスクな選択を好んでいないという説と、特定の状況に依存した結果という二つの説が考えられる。

仮に「運資源ビリーフ」を持つ者が前者に当てはまる場合には、全般的に不確実な事象を好まないパーソナリティを持つ可能性が考えられる。そこで以下の4つの側面から不確実な事象に対する指向性を測定し、検討を行うことにした。

あいまいさ耐性

リスクな選択が結果の曖昧性を強調する選択とすれば、「運資源ビリーフ」を持つ者はあいまいさ耐性の程度が低いのかもしれない。そこで今川(1981)の作成したAmbiguity Tolerance Scale(あいまいさ耐性尺度)から、他者の反応が含まれるもの、特定の状況依存的な項目を省いた中から、今川のG-P分析でt値が5以上の値を示した6項目(「自分がほとんど影響力を持たないような状況では、かなり不安を感じる」、「知っている人ばかりの集まりの方が見知らぬ人の多い集まりよりも好きだ」、「答えがありそうもない問題には、何の魅力もない」、「物珍しいことよりは、ふだんから慣れ親しんでいることの方が好きである」、「勝つ確率の高い賭けよりは、ある程度の危険を犯して賭けたい」、「外に遊びに出るときには、何かしら目的を持っていく方だ」)を用いて、「運資源ビリーフ」との関連を調べた(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)。

認知的な統制欲求

「運」を資源のようなものとして考えること自体が、統制可能性の小さい「運」を、少しでも統制可能な形で捉えようという思考の表れかもしれない。そこで、いわゆる認知的な統制欲求(need for control)を測定した。項目の内容は「自分で結果をコントロールできない行動はなるべく避けたい」、「自分の努力でカバーできないことはしない方だ」、「偶然に身を任せるようなことは好きではない」の3項目である。これらはBurger&Cooper(1979)の認知的な統制欲求(desire of control)の項目を元にして新たに作成した(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)。

クジを引く回数

この項目は「運資源ビリーフ」を持つ者は不確実な事象自体をどのぐらい好ましいものと思っているのかを測定するために用いた。

課題は的中確率が4分の1の箱から1回だけクジを引く場合と、的中確率は2分の1であるが2回の中する必要

がある場合に、どちらを好むのかを選択させた。どちらの選択も、全体の成功確率は同じで、かつもらえると仮定した賞金も同じであるが、不確実な事象自体を好ましいものと判断するならば、クジを引く回数自体が少ない、クジを1度だけ引く前者の状況の方を好むと推測する。

リスク回避志向尺度

この項目は「運資源ピリーフ」を持つ者が、全ての事象に対して弱気で慎重であるのか、それとも「運の定量感」や「運の減少感」を感じる場合という、状況に応じて慎重な行動を取っているのかを検討するために測定した。

尺度項目は楠見(1994)の項目から、今回の調査対象には不適である(大部分は学生)と考えられる「住居を選ぶとき、火事に対して安全な作りであるか気になる」の項目を除いた16項目を用いた(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)。

2. 私的自己意識

ギャンブルなどで、直前に得た「幸運」が、その後の選択に影響するとすれば、このような判断では事象間での独立性が無視されている可能性がある。理由として、事象そのものよりも、事象の結果(「幸運」を得たこと)から、自分の「運の状態」の判断をしていることにあるのではないかと推測される。この点からは、「運」に対する意識の強さの差異が影響していると考えられるが、必要以上に「幸運」に意味付けを行うことが、過剰なほど自己に目を向けることにもつながっているかもしれない。

そこで、菅原(1984)の作成した私的自己意識尺度のうち、因子負荷量が0.5以上で、かつ内容から状態としての自分を観察していると考えられる3項目(「つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」、「その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい」、「他人を見るように自分をながめてみることもある」)を用いて、「運資源ピリーフ」との関連を調べた(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)。

< 統計的な知識に関する項目 >

3. ギャンブラーの錯誤(gambler's fallacy)に対する理解

ランダムに結果が決まるような事象では、いくら同じ結果が連続して続いたとしても、次の事象の結果に影響を及ぼすことはない。しかし、数多くの試行を繰り返せば生起確率に近づくという大数の法則を意識して、生起確率の判断がされた場合には、特定の結果が占める割合が生起確率より極端に偏ることはおかしいと考えるために、観察した事象数が少なくても、同じ結果は連続しにくいと判断しやすくなる傾向がある(ギャンブラーの錯誤)。

「運資源ピリーフ」を持つ者が、「良いことが連続しない」ように判断しやすいのは、単に良い結果が偏ったことに対

して確率的な疑問を持つことで、このギャンブラーの錯誤的に事象の成否を判断しているという可能性も考えられる。

そこで、コインを10回連続して振るゲームで、連続して表が5回出たという状況を想定してもらい、次に出やすいと思うのは「表」か「裏」か、それとも「どちらかわからない」のうち、どれか1つを選択してもらった。もし「運資源ピリーフ」を持つ者が、「運の減少感」や「運の定量感」とは無関係に、ギャンブラーの錯誤から「良いことが連続しない」と考えているのであれば、「運資源ピリーフ」を持つ者は「裏」が出やすいと判断するだろう。

< 過去の経験に関する項目 >

4. ギャンブルへの関与度/勝負事に対する関与度

「大事な勝負の前では運を残しておきたい気がする」という項目のように、結果が重要な場面ほど「運」が意識される度合いが高まるとすれば、勝負事を観察する機会は「運」について思考する機会を増やし、その結果が「運資源ピリーフ」の有無を生み出すのかもしれない。そこで、ギャンブルへの関与度及び勝負事への関与度と「運資源ピリーフ」の関連性を改めて探ることにした。

ギャンブルについてはこれまでの経験及び頻度、どのようなギャンブル(麻雀・パチンコ・競馬・競輪・カード・宝くじ・他)に携わってきたかを尋ねた。頻度については、「全くしたことがない」から「よくする」までの5段階に加えて、「昔はしていたが、今はほとんどしない」という項目を加えて選択してもらった。勝負事への関与度については、「かなり関わってきた」から「ほとんど関わってこなかった」までの5段階で測定した。

< 世界観に関する項目 >

5. 迷信・不思議現象に関する項目

「運」によって事象を説明することが俗信であると考えれば、迷信や不思議現象との関連性が高くても不思議ではない。また「運資源ピリーフ」を持つ者がネガティブな結果を回避する傾向にあるなら、もともとネガティブ事象を回避するために行う迷信行動と共通した部分がある。

今回の調査では、占いだけでなく迷信・不思議現象を信じる度合いを測定し、「運資源ピリーフ」との関連を探った。項目内容は、奥田・伊藤・河野・福内(1992)の項目から、ト占因子を中心に負荷量が0.6以上かつ現代的な項目に、中島・渡邊・佐藤(1992)の「神社への合格祈願」及び「ラッキーナンバー」の項目を加えた以下の10項目(Table2)を作成し、「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で測定を行った。

6. 因果観及び欲望に関する項目

因果観に関する項目

「運資源ピリーフ」の「運」に限界量があるという考え方や、良いことは連続しにくいという考え方は、因果応報的な戒

めを含む考えと類似した部分がある。とてつもない「幸運」に対して、畏怖の念を抱いているのかもしれない。

そこで、結果に対する因果観の項目を測定した。測定した項目は「不幸な目にあうのは悪いことをした報いだ」「基本的には世の中は公正なものである」の2項目である(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)

利益への欲求

さらに「運資源ピラーフ」を持つ者が、「良いことは連続しにくい」ように考えたり、「幸運」な結果の後で、リスクの低い選択をしやすいのは、実際に良い結果が連続した経験が少ないからではなく、良い結果を得たことで満足してしまい、さらなる利益を得ようとするような欲が薄い(動機付けが低い)ことが理由であるとも考えられる。

そこで回答者の利益への欲求の程度を測定する項目を作成した。項目は「ある程度のところで満足してしまうことが多い」及び「どちらかといえば欲のうすい方だと思う」の2項目を測定に用いた(「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で回答)

7.「運」に関する態度項目

「運資源ピラーフ」尺度の項目を始めとした「運」に関する態度の項目を計25項目測定して、「運資源ピラーフ」との関連を探った。測定した項目は、「運資源ピラーフ」尺度項目(6項目)、「運」と努力に関する項目(4項目、村上(1997)より)、「運の強弱認知」に関する項目(2項目、村上(1997)より)、その他「運」や「ツキ」に関する態度の項目(13項目、主に村上(1998)より)。これらについても「まったくそうだ」から「まったくちがう」までの7段階で測定を行った。

結果

「運資源ピラーフ」尺度得点の作成 「運資源ピラーフ」尺度を測定する6項目は、評定値を合計して「運資源ピラーフ」得点を作成した。項目は逆転させて、得点が高いほど「運資源ピラーフ」を信じる度合いが高いことを示している。平均は24.95点($SD=6.70$)、信頼性の係数は.82であった。

これらの得点に性差は見られなかった(男:25.13点、女:24.87点)。また年齢と「運資源ピラーフ」得点間にも関連は見られなかった。さらに「運資源ピラーフ」得点の平均値によって、「運資源ピラーフ」高群(89名) / 「運資源ピラーフ」低群(95名)に分け、以下の分析に用いた。

不確実な事象に対する指向性との関連

あいまいさ耐性 一部の項目を逆転させて合計し、「あいまいさ耐性」得点を作成した。この得点が高いほどあいまいさ耐性の程度が低いことを示す(平均:34.85点、 $SD=6.01$ 、 $r=.46$)。

以上の得点を従属変数、「運資源ピラーフ」の高低を独立変数にして、分散分析を行ったが、有意な差は見られ

なかった($F(1,182)=1.23$, ns ; 低群:34.37vs 高群:35.36)。

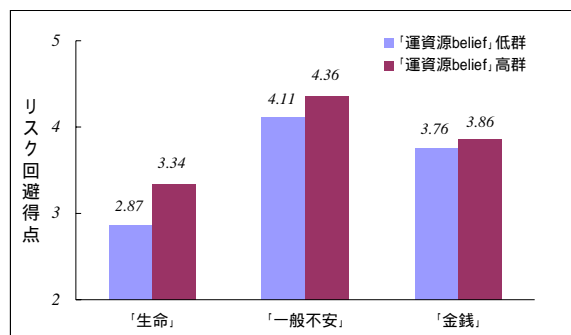
各項目ごとに同様の分析を行ったが、「自分がほとんど影響力を持たないような状況ではかなり不安を感じる」の項目のみ、「運資源ピラーフ」の高群の方が値は高いという有意差が見られた($F(1,182)=5.65$, $p<.05$; 低群:3.34vs 高群:3.84)。

認知的な統制欲求 項目は逆転させて合計し、認知的な統制欲求得点を作成した。この得点は高いほど認知的な統制欲求が高いことを示す(平均:12.05点、 $SD=3.06$ 、 $r=.52$)。信頼性係数の値は低いが、因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果では1因子に負荷したので、これは項目数が少ないため(3項目)と考えられる。

以上の認知的な統制欲求得点を従属変数、「運資源ピラーフ」の高低を独立変数にして、分散分析を行ったところ、「運資源ピラーフ」高群の方が、低群よりも認知的な統制欲求は高いという有意差が見られた($F(1,182)=3.91$, $p<.05$; 低群:11.54 < 高群:12.59)。

各項目ごとに同様の分析を行ったが、「自分で結果をコントロールできないような行動はなるべく避けたい」以外の2項目で、それぞれ「運資源ピラーフ」の高群の方が値は高いという差が見られた(「自分の努力で〜」: $F(1,182)=3.05$, $p<.10$; 低群:3.71 < 高群:4.10、「偶然に身を〜」: $F(1,182)=5.10$, $p<.05$; 低群:3.47 < 高群:4.06)。

リスク回避志向尺度 リスク回避志向尺度の項目は、梶見の分類に基づいて3つの下位尺度得点を作成した。「飛行機、観光バスに乗る場合、もし大事故にあったらということを考えてしまう」などの「生命に関するリスク回避」得



点(6項目、平均:22.79点、 $SD=8.89$ 、 $r=.83$)、「寝る前に戸締まり、火の元を確認しないと心配である」などの「一般的な不安」得点(5項目、平均:20.76点、 $SD=4.80$ 、 $r=.42$)、「ゲームではお金をかけないと面白くない」などの「金銭に対するリスク不安」得点(5項目、平均:19.87点、標準偏差:4.79、 $r=.68$)である。いずれも、得点が高いほどリスク回避志向が強いことを示す。

各得点を従属変数、「運資源ピラーフ」の高低を独立変

数にして分散分析を行ったところ、「運資源ピリーフ」高群の方が低群よりも、「飛行機、観光バスに乗る場合、もし大事故にあったらということを考えてしまう」など、生命に関するリスクの回避志向が高いという有意差が見られた ($F(1,182)=7.77, p<0.01$; Fig.1 参照)。

クジを引く回数 クジを引く回数(1回もしくは2回)と「運資源ピリーフ」の高低の間で χ^2 分析を行ったが、1回勝負を望むという人数に有意な差は見られなかった(低群:44.4%vs 高群:34.5%)。

私的自己意識尺度との関連性の検討 本研究で用いた私的自己意識尺度の3項目は合計して、私的自己意識尺度得点を作成した。得点が高いほど私的自己意識が高いことを示す(平均:14.64点, $SD=3.28$, $r=.63$)。

以上の得点を従属変数、「運資源ピリーフ」の高低を独立変数にして、分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった ($F(1,182)=0.12, ns$; 低群: 14.57vs 高群: 14.73)。同様に各項目ごとに分析を行ったが、有意な差がある項目は見られなかった。信頼性係数の値が低いが、項目ごとの分析では差はないため、関連はないと言えるだろう。

ギャンブラーの錯誤に対する理解 「運資源ピリーフ」を持つ者は、どの程度ギャンブラーの錯誤的な考え方をしやすいのかを確かめるために2通りの分析を行った。

まず、「表」か「裏」のどちらかが出やすいと思った者を一群、「どちらかわからない」と判断したものをもう一群として「運資源ピリーフ」高低との間で χ^2 分析を行ったところ、「運資源ピリーフ」高群の方が「どちらかわからない」と判断した者が少ないことが分かった ($\chi^2=5.51, df=1, p<0.05$; 低群: 31.1% > 高群: 16.1%)。

さらに「どちらかわからない」と判断した者を除いて、出やすいと判断した面(「表」か「裏」)と「運資源ピリーフ」高低との間で χ^2 分析を行ったが、「運資源ピリーフ」高群の方(68.5%)が低群(59.7%)よりも「裏」と判断した者は多かったが、有意な差とは言えなかった。

ギャンブルや勝負事に対する関与度合いとの関連 「運資源ピリーフ」の高低を独立変数にして、勝負事に対する関与度合いとの関連の分析を行ったが、両者に差は見られなかった(低群:2.50vs 高群:2.75)。

さらにギャンブルの関与度合いを経験の大小(「全くしたことがない」「ほとんどしたことがない」が経験小、その他は経験大)で二分し、「運資源ピリーフ」高低との間で χ^2 分析を行ったが、違いは見られなかった(低群:41.5%vs 高群:37.9%)。同様に個々のギャンブルでも、経験の違いは見られなかった。

迷信・不思議現象に関する項目との関連 迷信や不思議現象の信用度に関する10項目は合計して、「迷信・不思議現象」得点を作成した。項目は逆転し得点が高いほど、これらの事象を信じたり、特別な行動を行っていることを示している(平均:37.14点, $SD=10.28$, $r=.80$)。

以上の得点を従属変数、「運資源ピリーフ」の高低を独立変数にして、分散分析を行ったところ、「運資源ピリーフ」高群の方が、低群よりも迷信・不思議現象を信じているという有意な差が見られた ($F(1,173)=15.92, p<0.001$; 低群: 34.22 < 高群: 40.17)。

同様に各項目ごとに分析を行ったが、「お守りや幸運のアクセサリーなどを身に付けている」、「この世の中に超能力を持つ人がいると思う」の2項目を除いて5%水準で、同様の有意な差が見られた(Table2参照)。

因果観及び欲望に関する項目

因果観に関する項目 結果に対する因果観の項目(2項目)はそれぞれ分析を行った。「運資源ピリーフ」の高低を独立変数にして分散分析を行ったところ、「不幸な目にあうのは悪いことをした報いだ」の項目で、「運資源ピリーフ」高群の方が肯定割合は高いという有意な差が見られた ($F(1,182)=7.86; p<0.01$; 低群: 4.00 < 高群: 3.36、逆転項目)。

「基本的には世の中は公正なものである」の項目では有意な差は見られなかったが、同様に「運資源ピリーフ」の高群の方が肯定的に考えていた(低群:5.11 < 高群:4.80、

Table2 迷信・不思議現象に関する項目と「運資源ピリーフ」の関連

	「運資源belief」		
	低群	高群	
・のろいやたたりを信じている	3.71	4.28	**
・どちらかといえばエンギをかつぐ方である	4.29	4.85	**
・守っているジンクスがある	3.29	3.87	**
・自分のラッキーナンバーがある	3.27	3.93	**
・神社に合格などを祈願することは大切だと思う	4.49	5.26	***
・お守りや幸運のアクセサリーなどを身に付けている	2.90	3.42	
・おまじないをよくする	2.37	3.17	***
・バイオリズムに合わせて行動したことがある	2.70	3.27	**
・この世の中に超能力を持つ人がいると思う	4.31	4.35	
・占いに従って、何かしらの行動を取ったことがある	2.88	3.77	***

(*** $p<.01$,** $p<.05$,* $p<.10$ 値は高いほど肯定)

逆転項目)。

利益への欲求 利益への欲求度合いの項目(2項目)もそれぞれ同様の分析を行った。しかしながら「ある程度のところで満足してしまうことが多い」の項目(低群:3.34vs高群:2.98)、「どちらかといえば欲のうすい方だと思う」の項目(低群:4.73vs高群:4.81)の両方とも有意な差は見られなかった。

「運」に関する態度項目 「運資源ピラーフ」の高低別に算出した「運」に関する態度項目の平均値を Table3 に示した。「運資源ピラーフ」の有無による態度の特徴は以下の4点にまとめられる。

1. 「運資源ピラーフ」の高低に限らず、「運」を肯定する者は、ほとんど「運の強さには個人差があると思う」の項目に肯定的に回答していたことから、「運の強さ」を個人差として捉える傾向に差はないと考えられる。

2. 村上(1997)では自分が「運が強い」と思う者ほど、努力の量と「運の強さ」の結び付きを肯定していた。本研究でも合計得点(努力得点、 $r=.80$)を作成して、「運資源ピラーフ」との関連性を調べたが、得点に差は見られなかった。このことから、「運資源ピラーフ」によって「運」と努力を結び付けて考える傾向に違いはないと考えられる。

3. 「運資源ピラーフ」高群の値が明らかに高かったのは、「後々のことを考えて、素直に幸運を喜べないときがしばしばある」、「この幸運は余計だ」と感じるがある、「幸運に対してとまどいを覚えることがある」という項目である。

これらの項目の内容から考えると、「運資源ピラーフ」を持つ者は「幸運」をネガティブなものと認知している状況が多いのではないかと考えられる。それは「『運をムダ使いしてしまっただと感ずることが何度もある』、「運には使うべき場所や状況があると思う」、「突然やってきた幸運を『受け止めきれない』と感ずることがある」の項目に代表されるように、「幸運」の意味についての解釈がネガティブなためと考えられる。つまり「幸運」に対して何らかの違和感を覚えるようなネガティブ感情が生じている可能性がある。

所や状況があると思う」、「突然やってきた幸運を『受け止めきれない』と感ずることがある」の項目に代表されるように、「幸運」の意味についての解釈がネガティブなためと考えられる。つまり「幸運」に対して何らかの違和感を覚えるようなネガティブ感情が生じている可能性がある。

4. 「運の減少感」を感ずる経験のうち、「巨大な幸運」経験自体に「運資源ピラーフ」の有無による差がある可能性は、この結果から否定されるだろう。どちらかと言えば経験の量ではなく、「運を意識して行動することがある」というように、経験に対する意識の程度に差があると考えられる。

以上の項目(「運資源ピラーフ」尺度及び努力得点を除く)については、主成分分析を行った結果、以下の3因子を抽出した(寄与率55%)。

第一主成分($r=.78$)は「幸運違和感」主成分で、「後々のことを考えて、素直に幸運を喜べないときがしばしばある」、「『運をムダ使いしてしまっただと感ずることが何度もある』、「突然やってきた幸運を『受け止めきれない』と感ずることがある」、「この幸運は余計だ」と感ずることがある」、「幸運に対してとまどいを覚えることがある」の5項目で、合計得点は「運資源ピラーフ」尺度と強い相関が見られた($r=.54$)。

第二主成分($r=.56$)は「運意識」主成分で、「運を意識して行動することがある」、「運には使うべき場所や状況があると思う」、「自分が何かしらの行動を取ることによって、ある程度運はコントロールできる気がする」の3項目で、合計得点は「運資源ピラーフ」尺度($r=.27$)と努力得点($r=.34$)とはやや相関が見られた。

第三主成分($r=.50$)は4項目で、「『ツキ』は自然と良くなったり、悪くなったりするものだと思う」という項目以外に

Table3 運に関する態度項目と「運資源ピラーフ」との関連性

	「運資源belief」		
	低群	高群	
「運」と努力に関する項目(努力得点)	18.04	18.85	
「運の強弱認知」に関する項目			
・運の強さには個人差があると思う	5.80	6.12	
・生まれながらにして、運の強さ弱さは決まっていると思う	4.17	4.25	
その他「運」に関する態度の項目			
・「ツキ」は自然と良くなったり、悪くなったりするものだと思う	5.40	5.92	***
・「ツイているとき」とか「ツイていないとき」というようにツキの良し悪しが続くこともあると思う	5.63	5.67	
・後々のことを考えて、素直に幸運を喜べないときがしばしばある	3.00	4.51	***
・自分が何かしらの行動を取るによって、ある程度運はコントロールできる気がする	4.33	4.04	
・運やツキなんてものは妄想でしかない	2.75	2.58	
・日常生活における「ツキ」とギャンブルにおける「ツキ」は違うものだ	4.35	4.74	
・運を意識して行動することがある	3.22	4.06	***
・運には使うべき場所や状況があると思う	4.18	4.60	*
・「この幸運は余計だ」と感ずることがある	2.66	3.30	**
・幸運に対してとまどいを覚えることがある	3.32	4.17	***
・「運をムダ使いしてしまっただと感ずることが何度もある	2.67	3.81	***
・ビックリするほど、すごい幸運な目にあったことがある	3.82	3.74	
・突然やってきた幸運を「受け止めきれない」と感ずることがある	2.68	3.58	***

(*** $p<.01$,** $p<.05$,* $p<.10$ 値は高いほど肯定)

は、ツキの連続性に関する信念を表していると思われる項目(「『ツイているとき』とか『ツイていないとき』というようにツキのよし悪しが続くこともあると思う」と、「運の強さ」の個人差に関する信念を表していると思われる項目(「運の強さには個人差があると思う」)が負荷した。この項目間の相関係数は $r=.36$ だった。

さらに「『ツイているとき』とか『ツイていないとき』というようにツキのよし悪しが続くこともあると思う」の項目は、「運」そのものを肯定するかどうかに関する項目(「運やツキなんてものは妄想でしかない」)とも負の相関が見られた($r=-.29$)。なお、この因子の合計得点と「運資源ピラーフ」尺度得点との相関係数は $r=.20$ だった。

この主成分のうち、「幸運違和感」主成分の合計得点と「運意識」主成分の合計得点も $r=.43$ と高い関連性があることが示された。

考察

以上の結果から「運資源ピラーフ」を持つ者がどのような人物であるのかを考えてみる。

迷信や不思議現象を肯定する者が多いことは、科学的に証明されていないという点で、「運」を資源のように扱うことと一致すると考えられる。このことは「運」に関する態度項目の結果からも明らかである。「運資源ピラーフ」を持つ者は、お守りのように「運」を重要視し、意識して行動する割合も高い。さらには「不幸な目にあうのは悪いことをした報いだ」のような因果観にも表れている差異は、ネガティブなことを避けるために迷信行動は行われるという指摘(Jahoda,1979; 岡本,1988)とも一致する。「運資源ピラーフ」の影響はネガティブな結果をあらかじめ予測することから、余計な不確実な選択を回避するという行動選択に表れると言えるだろう。

このような「運資源ピラーフ」に従って行動することが迷信行動に近いと考えれば、「運資源ピラーフ」を持つ理由には、森田(1975)の言うように内因的な安心を得るためだけでなく、何かしらの「運を使って失敗した」経験(の認知)という外因があり、これが「幸運」の後でネガティブな結果を得やすいと考えるようなメンタルシュミレーションにつながっていると推測される。

しかしながら「運資源ピラーフ」を持つ者は、全ての不確実な事象が成功する可能性をネガティブに捉えている訳でも、不確実な事象自体を嫌っている訳でもなかった。

例えばリスクの回避志向に違いが見られたのは、生命に関する項目だけである。この生命に関するリスクには、損失に対する認知が影響を及ぼしている(吉村・山,1997)という結果もあることから、「運資源ピラーフ」を持つ者が示したこの傾向は、利益を得る(ポジティブな結果を得ようとする)ことよりも、致命的な損失を得ないようにする(ネガティ

ブな結果を避ける)方に視点が向きやすいことを示していると考えられる。

つまり「運資源ピラーフ」のような考え方を持つことは、リスクを常に回避する「弱気な」あるいは「慎重な」性格を反映しているのではない。むしろ、「運」と重要な状況の結び付き(村上,1997)から、重要な状況での不利益を見積もることで、リスク回避の態度が選択されやすくなることを示すと考えられる。つまりはいつでも悲観的な思考をしている訳ではない。この態度は、他者から見れば弱気に見える場合もあるだろうが、逆に何にでもリスクを好む者こそ、逆に匹夫の勇と呼べるかもしれない。

さらに曖昧さに対する寛容度合いやギャンブルに対する指向性、欲を持つ程度なども「運資源ピラーフ」とは無関係だった。つまり「確実な行動を取りやすい」人物ではなく、決して不確実な事象における選択自体を嫌っているわけではないことが分かる。

加えて、クジを引く回数についての好みも「運資源ピラーフ」の有無とは無関係であった点は、「運資源ピラーフ」を持つ者が、いつも事象間の独立性を無視しやすいのではなく、とりわけ「運の減少感」や「運の定量感」を喚起された場合に、「成功した事象の後では失敗しやすい」と予測するという研究結果(村上,1995, 2000, 2001)を裏付けているとも考えられる。また、「運資源ピラーフ」を持つの方がギャンブラーの錯誤を示しやすいという傾向も見られなかった。

逆に「運資源ピラーフ」が形成される土台になっていると考えられる過去の経験については、勝負事やギャンブルの経験の程度に違いが見られなかったことや、必ずしも「運資源ピラーフ」を持つの方が、巨大な「幸運」経験があったと認知している訳ではないことから、過去の経験に差があるとは言えない。さらに私的自己意識尺度得点とも無関連であった点からも、経験や事象に対する注意の置き方に違いがあるとも言えない。

以上の結果からは、過去の経験(に対する認知)の違いや統計学的な知識が特に乏しいために、非合理的な判断をしているという説明は妥当ではない。また「運資源ピラーフ」の有無が、通状況的な性格特性のような要因で説明される部分は小さいだろう。

これらのことから総合的に判断すると、「運資源ピラーフ」の有無は、「幸運」のようなある種の経験を解釈する視点として表れているのではないかと考えられる。この視点の違いは「運」を資源のように扱うことで、自分の(時には他人の)成功や失敗を解釈することに対する思いこみの違い、さらにはこのような解釈を続けていった結果、半ば無意識的に解釈や行動に反映される程度の差ではないかと考えられる。

というのも、これだけ多くの者がこの「運」を資源のように捉

える」傾向を持つ理由を考えてみた場合に、論理的なつじつまが合いやすく、非常に使いやすい概念であることが挙げられる。

Gilovich(1991)は、人は仮説に合致する情報だけを探そうとする傾向が強いことを指摘している。例えば占いなどはその好例である。「運資源ピラー」に当てはまるような情報は、日常生活に頻繁に見られる探しやすいものであると考えられ、顕著性も高く、当然論理的なつじつまも合わせやすいと考えられる。そこで本研究の結果のように、仮説 - 「運資源ピラー」 - が堅固なものであるとすれば、この視点の違いは変わらないどころか、自己成就予言的に広がっていくことだろう。

「我々は、自ら幸運、不運をつくって、これに運の減少なる名称をつける」

(アメリカ大統領ジョンソンの言葉から)

引用文献

- 青柳 肇・細田一秋・小嶋正敏 1985 学習性無力感に関する研究(その 1) - 無力感尺度の作成とその信頼性・妥当性 - 都立川崎短期大学紀要, **18**, 17-24.
- Burger, J. M. & Cooper, H. M. 1979 The Desirability of control. *Motivation and Emotion*, **3**, 4, 381-393.
- Furnham, A. 1988 Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences. Elmsford, New York: Pergamon Press. (細江達郎(監訳) 1992 しろうと理論: 日常性の社会心理学 北大路書房.)
- Gilovich, T. 1991 *How we know what isn't so: The fallibility of human reason in everyday life*. The Free Press. (守一雄 守秀子(訳) 1993 人間この信じやすきもの 迷信・誤信はどうして生まれるか 新曜社)
- Heider, F. 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*. New York: Wiley. (大橋正夫(訳) 1978 対人関係の心理 誠信書房)
- 今川民雄 1981 Ambiguity Tolerance Scale の構成(1) - 項目分析と信頼性について - 北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編, **32**, 79-93.
- Jahoda, G. 1969 *The psychology of superstition*. Harmondsworth: Penguin Book. (塚本利明・秋山庵然(訳) 1979 迷信の心理学 法政大学出版局)
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 4, 302-307.
- 楠見 孝 1994 不確実事象の認知と決定における個人差 心理学評論, **37**, 3, 337-356.
- 村上幸史 1995 運に関する統制感の研究 日本社会心理学会第 36 回大会発表論文集, 26-29.
- 村上幸史 1997 運の強弱に関する主観的認知構造 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文(未公刊)
- 村上幸史 1998 ツキの流れは占いで読む!? - 運に関する信念における占いの情報的影響 - 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集, 232-233.
- 村上幸史 1999 ギャンブラーはツキをどのように読むか 日本社会心理学会第 40 回大会発表論文集, 208-209.
- 村上幸史 2000 チャンスは一度だけ - 運に関する統制感の研究その 2 - 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 282-283.
- 村上幸史 2001 「運試し」が余計になるとき - 運に関する統制感の研究その 3 - 日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集, 634-635.
- 村上幸史 準備中 運とツキに関するリスクテイキング行動における認知的判断
- 森田正馬 1975 森田正馬全集第 6 巻 白揚社
- 中島定彦・渡邊芳之・佐藤達哉 1992 日本社会心理学会第 33 回大会 自主企画「俗信・偏見・ココロロジー」資料
- 岡本淑人 1988 迷信・格言への態度と行動 心理学研究, **59**, 106-112.
- 奥田達也・伊藤哲司・河野和明・福内裕喜恵 1992 俗信の構造へのアプローチ - 性差・年齢差を中心に - 日本社会心理学会第 33 回大会 自主企画「俗信・偏見・ココロロジー」資料
- 沢宮容子・田上不二夫 1997 楽観的帰属様式尺度の作成 教育心理学研究, **45**, 3, 355-362.
- 菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of educational Psychology*, **71**, 3-25.
- 山下兼治 2001 運に関する信念と楽観・悲観帰属様式との関連性の検討 関西学院大学社会学部卒業論文(未公刊)
- 吉村典子・山 祐嗣 1997 楽観性特性がリスク認知と行動に及ぼす影響(1) 第 61 回日本心理学会大会論文集 980.

註

- 1) この研究で用いられた項目は、因子分析の結果、村上(1995)の 11 項目から「今までツイていなかったなら、これからツキがやってくると思う」及び「人生全体を通して、運のトータル量は決まっているような気がする」を除いた 9 項目の合計得点である。

“Luck Resource Belief” as a measure: Review and its view

Koshi MURAKAMI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

"Luck" is often likened to as resource, that it decreases by using. Murakami (1995) called this metaphor the "Luck Resource Belief". Past research clarified on the phenomenon in which how "Luck Resource Belief" was used for actual causal inference or judgment at uncertain situations. This research, on the other hand, aimed to focus on another aspect, examining the characteristics of persons who maintains the "Luck Resource Belief". The item used to measure the "Luck Resource Belief" was clarified in Study 1. After reviewing the correlation with other variables in Study 2, the Study 3 reported a research in support of the Study 2. The psychological aspect of the "Luck Resource Belief" was discussed.

Keyword: "Luck Resource Belief", gambler's fallacy, superstition, life